

Title	東禅寺所蔵「天寿室日記」について
Sub Title	On the diary of Tenjushitu (天寿室) kept in Tozenji (東禅寺)
Author	高橋, 正彦(Takahashi, Masahiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.1/2 (1970. 5) ,p.319- 330
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	今宮新先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700500-0323

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東禪寺所蔵「天寿室日記」について

高橋正彦

(一)

幕末の日英修好通商条約調印の結果、イギリス政府は安政五年十一月に至り、広東総領事であったオールコックを日本駐在の総領事兼外交代表に任命した。彼は外相マーメスブルグからの指令「日英両国の関係が当初から円滑に運ばるものとは考えぬから、貴下は適切なる措置考慮を払って日本政府を善導し両国間の貿易の発展を期し急激焦躁なる態度を慎み、漸進主義を執って、その国情民意を知るに努め、強固なる両国の平和を扶植するに最善の努力を尽すべきである。」(下略)を受けて、安政六年、イギリス軍艦サムソン号に乗り長崎を経て、五月二十六日(一八五九年六月二十六日)にワイス、ユースデンらの館員を率いて江戸に到着した。

彼は滞在の宿舎を求め、当初は芝の真福寺などへも出むき視察したが、条件が折会わず結局高輪の東禪寺に決定した。この寺院は十分な土地と宿泊設備を有し、しかも海岸に近く、好条件に恵まれていた。

オールコックは当時の東禪寺の様子を大君の都(大君の都上)、山口光朔氏訳、岩波文庫一七八頁以下)の中で次のようにいっている。

「東海道を曲がって、入口の門をはいると、スギとマツの木がはえている長い並木道がある。そこをとおって、堂々たる二階建ての第二の門をくぐり、ハス池のあるあき地をすぎると両側に植えこみがあり、最後に右手の入口をはいってうひとつの庭を通過すると、われわれの想像どおりに美しい日本の庭園やりっぱな建物がある。そのすぐ前には芝生があつて、池のかなたまでつづいており、池には丸木橋がかかっていた。そしてこの橋の向こうにはシュロの木やツツジや、短く刈り込まれて円い丘のようになっていた大きな榎木のしげみがあり、そのうしろには、りっぱないろく／＼な日本の木や、カシやカエデなどの木からなる見事な林のついでがある。また、池の向こう側にいたる丸木橋のつき当たりにはシュロの木やタケが点在しており、整枝されたウメの老木も見うけられた。右手の方は傾斜の急な土手によって景色がさえぎられているが、その土手にも種々雑多な花のさく灌木や笹がおいしげり、林のついで以上のみごとである。ここをとおっている小道をたどってゆくとジグザグの階段があり、それをのぼりつめると、りっぱな並木道にでて、ひろい高台にたどりつく。そこはよく展望がきいて、湾全体と下の市街の一部がまるで手にとるようにながめられる。」つづいてオーロコックは「正直なところ、わたしじしんは、この隠れ家があらゆる点でも完璧であるがゆえに、なにか恐ろしいお返しがわたしの運命のうえにふりかかるのではないかということを恐れた。この予感あまりにもみごとに的中し、しかも高価な代償を支払わされたようだ、わたしはこの予感をよく思い出す。」と書いている。

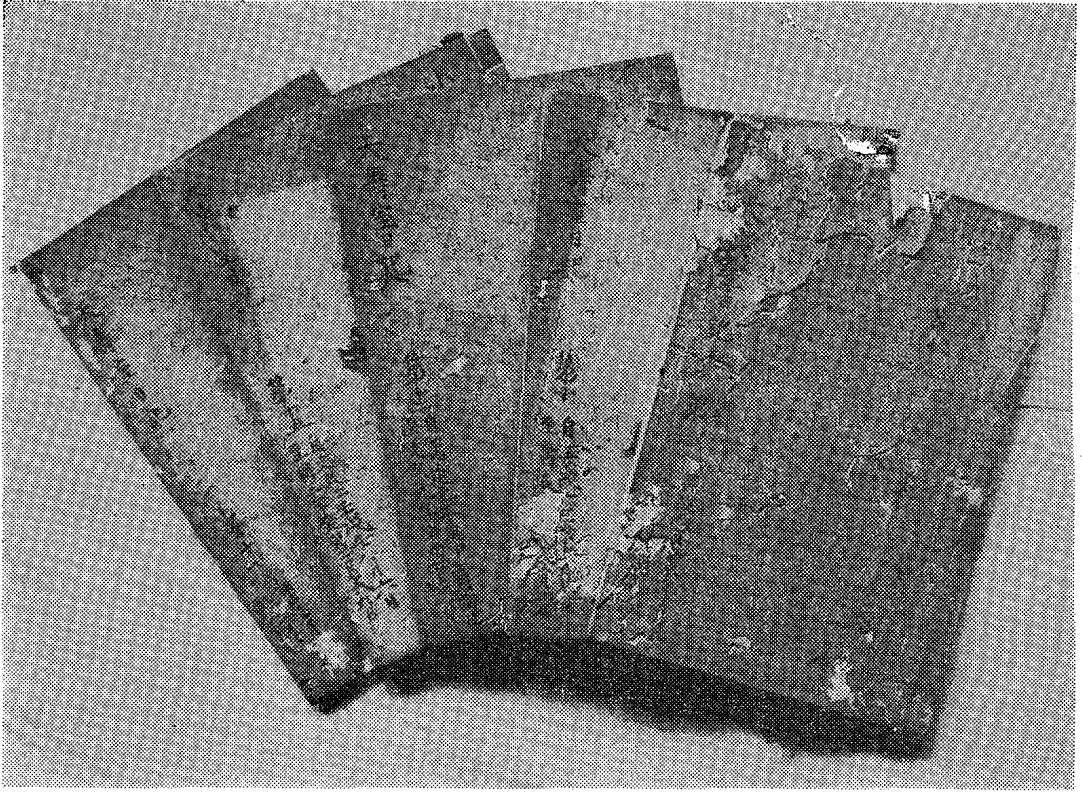
その後、駐日公使に昇格したオーロコックは一時、香港に赴いたが長崎を経て、陸路江戸への帰還を企てた。これにはオランダ総領事デ・ウィット、及び新任のイギリス公使館書記官オリファント、長崎駐在のイギリス領事、モリソンらが同行した。オーロコックが江戸へ帰着したのは文久元年五月二十七日（一八六一年七月五日）のことであった。この外国人等の東海道旅行を神州の地を汚したものとして憤慨した一群が、公使以下を襲殺せんと企て、帰着の翌日、すなわち二十八日に東禅寺襲撃事件が起つたのである。

(二)

東禪寺は現在地 港区高輪三一六―一六にある臨濟宗妙心寺派の名刹である。慶長十五年、日向飢肥の藩主、伊東祐慶の開基で、開山は嶺南和尚である。嶺南は俗名、守永氏。日向国飢肥の人で、はじめ妙心寺の定山和尚に随い、後、駿河の清見寺の説心和尚に謁し、更に法山大心院の芳沢禅師の室に入り、練行の末、慶長十四年に印証を得たのである。その翌年仏日山東禪興聖禅寺を江戸城下桜田に開き、後、寛永十三年に現在地に移転し、今日に至った。開基の伊東氏をはじめ、仙台、宇和島の両伊達氏、岡山、鳥取の両池田氏、豊後臼杵の稲葉氏、信州高島の諏訪氏、奥州一関の田村氏、など諸大名を檀家にもっている寺院である。

開山の嶺南は寛永廿年七月廿七日に七十一才で寂したが、後、大天法鑑^{はかん}禅師を勅諡された。その後を承けて、二代定州宗陶、三代大仙龍隠、四代黙水龍器、五代鹿苑関誉、六代南英祖楨、七代萬庵原資、八代叔鳳宗琨、九代洪道祖量、十代琳山宗雅、十一代白堂全陸、十二代壹雲古倫、十三代天栄崇勲、十四代月庵智丈、十五代五常元常、十六代大陵景廉、十七代春山宗教、十八代絶学文毅と相継ぎ、現住、十九代松田明道氏と至っている。

江戸時代末より明治初年にかけて当時の東禪寺歴代が記したとみられる記録類が、かなりの数、現在保存されている。管見によれば未だこれらの史料について紹介し、その内容の一端を報告したものを知らないもので以下、当寺の住持の室号を付した「天寿室日記」とよばれるものを紹介したい。



「天寿室日記」は合計六三冊からなる冊子本で、そのうち約半数のものには後述の如く「天寿日記」「天寿小補日記」という名が表紙左端に記されている。外題の天寿室日記の下には「第一從安政三丙辰年五月至同年十二月廿一日」のように、記されている。

各冊共、上下二二、七センチメートル、左右一五、七センチメートル。内容は各半葉十行より成り、一行にかなりの部分が二行書きされている。欄外にも若干記載されているところがある。保存状態は数冊を除きかなり悪く、虫喰や湿氣の爲、文字のよめぬところ、更には料紙が湿氣等のため密着し、とり扱いに困却する冊子も少くない。

全六三冊中、九冊に「天寿日記」とあり、その最も時代の古いものは寛政八年三月よりと記載があるが、これが当時のものかどうかは疑問が残るが、恐らくは「天寿室日記」が書きはじめられた安政年間以後、転写されたものであろう。また「天寿小補日記」とあるものが二十八冊あり、天保十二年正月よりとある。これは外題に小補とあることから明らかにその後の筆写になるものであり、天保期のものとは思えない。この「天寿日記」及び「天寿小補日記」とあるものと「天寿室日記」とあるものと比較すると、内容の文字において、前者は極めて整い、筆写の速度も遅いが、後者は文字も整わず、丁寧に書写した部分のほかに、草率の間に書き記したとみられる箇所も多く、文字の訂正、追加もままみられるところから、日々書き留めていった日記であって、前者の「天寿日記」「天寿小補日記」とあるものとはかなり趣きを異にするものである。

(三)

オールコックは前述のように安政六年五月廿六日に品川に入港した。翌廿七日に幕府は外国奉行水野忠徳、堀利熙、酒井忠行等をオールコックの許に派遣した。廿九日にオールコックは幕府の提供した彼の宿舎である東禅寺を検分した。しかし宿舎としての準備が整わぬため、六月はじめまで移ることなく過ぎたが、この間の動向を東禅寺側よりみた記述が次

にあげたものである。

二日以前の部分には英人宿についての記載は見当らず三日より七日にかけての記事を紹介しておきたい。

「安政六年六月

三日晴（前略） 英人宿仕溝出来 本堂内番所伊東足輕式人 庫裡入口同断

四日晴（前略） 仙台詰士メ六人 内徒目付壹人 備前家詰士徒式人 足輕四人」

右の本文のほかに四日の頭注として「英人宿ニ付檀家警固」と記載されている。

一 五日晴（前略）

△松平伊豆守殿 御差紙 英国使節明六日其寺江引移候旨外国奉行申聞候間可被得其意候

宿英人名

ミニストルノ名

エールコック 六十才

ユウスデン 四十才

ゴウル 二十八才

六日風陰（前略）

△英人不引移大風ニ而上陸六ヶ敷

通弁官

トナルト 四十五才

レツチル 三十才

七日雨（前略）

△英人三十人余り移来

以上仕官ノ者

△仙台家今日々靈屋前兩人つゝ相詰候、下番所三人

ラレン 二十二才

伝吉 二十九才

ゴウトドルテル

△告報 夷人咄無用 往来如仕 靈屋□□式人

万延元年七月十八日の頭注欄外に

「夜小雨公辺免許ニ而英人今日登岳、公吏供奉警衛御丁寧之取扱前代未聞」

同月廿一日の欄外に「^{フラン}仏郎登城」とある。

「万延元年

八月廿日雨（前略）

英国ミニストル対面申入

△英国ミニストル面会致度趣外国方役人中江申入ニ付相願申候

之願

廿五日晴

英人相見奉行所へ伺

△英国ミニストル□□面会望候ニ付役人衆迷惑之趣内諭有之候ニ付面会之儀松平伊豆守殿

伺書□□持参不苦趣申渡候

△松平伊豆守殿 御差紙明日中呼出 同家寺社役人手紙ニ而ミニストル面会差延之趣申来

同家又候、役人ミニストル面会□□貴寺御実名認越申来以其同所ノ用向尋来外国方問合

候処是迄滞留借宿之礼詞申旨咄故其趣返答

万延元年十月

七日晴（前略）

英人ミニストル居所失火

△英国ミニストル書院失火、煙ニ而薪火煙リ出シ而火天井ニ移リ少し焼□候、小遣之者火事々々ト呼候間、天寿茶ノ間出揮指撞鐘鳴し、役僧納所火本見分ニ参ル、然吐水下部五人ニ而書院へ水漉之由、客殿ハ□寮殿守へ申付位牌長持へ仕舞候、天寿ハ納戸の物ヲ土蔵へ入候処、鎮火ニ相成候ニ付見合候、左官清五郎八人参土蔵目ヌリ致候、左官庄五郎参古着屋杣七津田五郎左エ門菓子持参桶屋酒壺升持参経師長兵衛植木屋勝五郎大工要助磯二郎茂吉山本久米次郎、殿木両家人数召連役人見舞、水野家人数用意役人良哉宅迄来、寿昌寺使僧恩沢寺使僧東光寺使僧瑞松寺使僧其外隣寺此方鐘相凶之撞之由人々使僧見舞之処異人玄関へ参候故此方江者不知火消二本榎猿町高輪可詰之由、(下略)

(四)

五ヶ国条約の締結後、本邦在住の外国人と我國民との対立は一層激化した。それが我國民間に存した排外思想によるにせよ、外国人の多くが我が國民性、国情の理解に乏しいものがあるにせよ、両者の關係は容易に融和することのない状態が引続き続いていった。

外国人の中には幕府の制止にもかかわらず自由に市街を通行し、騎馬などで街頭を疾駆したり、狩猟などにおいて発砲を試みたりするものがあつた。衆知の如く、安政六年十一月十四日には外国奉行は英米仏各側の使臣に書を送り、江戸近郊においては日本國民にも遊獵発砲を禁じているので、各国使臣も亦夫々の自國民に同様、禁止するように要請し、これは更に十二月十一日にも老中脇坂安宅よりも同じような意味のことを通告している。しかしこれらの通告にもかかわらず江戸、横浜周辺で外人の狩猟などの行いは跡を絶たず、この為日本人で傷害を受けるような事件もまゝみうけられた。

他方外国人の自由な振舞いに対し、日本国民の感情も好転せず、江戸横浜両地を中心に外国人に対する暴行事件が頻々として起るに至った、これらは或いは外国人に対する通行の妨害、日本人からの悪罵、投石などや、ひいては武士による暴行脅迫のような形をとるものもあった。勿論これらの日本側の不法行為については外国側よりしばしば嚴重な抗議が提出された。このため幕府は色々な布告を出して日本側の不法行為を取締り、事態を改善すべく努力した。しかしこれらの措置にもかゝらず世情は彼我の間によりけん悪となった。

日本側よりの外国人暴行事件としては早く安政四年十月にアメリカ総領事ハリスが幕府の反対を押して上京し、將軍家定に面会を求めた時、水戸藩郷士堀江其他数名がハリス暗殺を企て、未然におわった事件がある。ついで安政六年七月には品川に来航していたロシア軍艦より横浜へ上陸した見習士官ロマン、モフトらが襲われて死去するという事件が起った。その事件は士官の死亡という大事件であるが、ロシア総督ムラビエフの穩健な処置により、大きな国際問題までには發展せずにおわった。

つゞいて安政六年十月十一日には横浜市街を通行中の清国人が武士により襲われ死亡した事件が起った。この清国人は神奈川のフランス領事館の傭であり、誤認されて襲撃されたらしいが、仏国総領事ベルクールは自国の傭である中国人の殺害事件に対し嚴重な抗議を幕府及び神奈川奉行にしたが、この事件も前のロシア士官襲撃事件と同様に下手人の探索に成功せず迷宮入りでおわってしまった。

万延元年一月七日にはイギリス総領事館に通弁として雇われていた伝吉なるものが殺害される事件がおこった。伝吉は紀州熊野の船頭であったが、十余年以前アメリカに漂流し、同国に逗留しておりこの間英語を習得したもので、帰国後オールコックにより通訳として雇われていたのである。(前記の如く、天寿室日記安政六年六月の条にその名がみられる) 伝吉は日本人に対して高慢な態度をとったり、市中で発砲するなど、不遜な行動が多く、このため日本人より恨みを買った。

ていたようである。この行動のためか、襲われて死去したのである。伝吉はイギリス公使館に勤務していたものであるから、オールコックは幕府に対し抗議を行い、伝吉の葬儀には幕府側より外国奉行二名が参列する手厚い待遇を示した。

日本人による外国人殺傷事件はその後万延元年二月のオランダ人デ・ボー、デッケルに対するもの、同年九月のイタリア人ナタール（フランス公使館勤務）を負傷させたのなど跡を絶たなかった。これらは外国人またはその使用人が殺傷されたものであり、犯人こそ逮捕されないが、いづれも日本人の手によるものであることは疑い得ない。その他日本人の排外的な動きは激しく、外国人が襲撃されるというような巷説はしばしば流布されていた。

万延元年十二月に至りアメリカ公使館の通訳であるハインリッヒ・ヒュースケンが暗殺される事件がおこった。ヒュースケンは一八三二年にアムステルダムに生れ、母国語であるオランダ語のほかフランス語、英語にも達者であった。家庭の事情もあって二十才前後より、アメリカに生活の場を求めて渡海し、そこで日本へ領事として赴任しようとしていたハリスに見い出され、ハリスに同行して安政三年七月に我国へ至った。万延元年の七月以降しばしばヒュースケンはロシア使節オイレンブルグの宿舎である赤羽根接遇所に赴き日普通商条約締結の交渉に協力していた。十二月十五日夜、ヒューケンは、騎馬で接遇所よりの帰路、襲撃され、まもなく死亡した。（ヒュースケンについては今宮新先生にヒューケンのことども、史学三六一二、三号）がある。

この事件はこれまで引つゞいて起った一連の殺傷事件に対する外国使臣達の憤激に更にわをかけるものとなり、彼らの激怒は頂点に達した。

翌文久元年五月に至り勃発した事件が東禅寺襲撃事件である。これは五月廿八日に水戸藩士有賀半弥達十余名が東禅寺にあったイギリス公使館を襲ったものであるが、公使オールコック達には異状なく、公使館を警備に当たっていた郡山、西尾の両藩の士に死傷者を出した。

前記のヒューズケン事件までについては天寿室日記は全く記していないがこの東禅寺襲撃については当然ながら記載がみられるので次にそれを掲げたい。

「文久元年五月廿八日晴

夷人館、狼籍者拾七人、右門右側竹矢来切崩し推入候、本堂仮建物ノ玄関唐紙ケトハシ夷人館へ切込乱妨之様子ニ而早
□□□候ニ付夷人館火出候哉見届候処、火手不見全乱暴ニ相違無之候、本堂知客心配出来客殿五人之者相隠、宗院ノ知
同本堂へ出かけ候処乱妨者一刀眉肩ノ腕切カケ候処□、深手ニアラス命ニ別条無之、早々疵養生被致外国方ノ医師相遣
候、狼籍者本堂へ入出家ニテ手向不致候、異人ヲ殺し候ト申□□半鐘打候処半鐘打候ハ、切殺致候由ヲドシ候間、相止
申候、早撃析(カ)ニ而火消人数相添候而、寺外取込候由、事静リ八時臥床東胤師同室警固、

廿九日晴 △外国御奉行御目付衆本堂狼籍者入口者見分、役僧立合 柳沢甲斐守殿、松平和泉守殿、警固人数御旗本」

この東禅寺襲撃事件の後、一ヶ年を経た文久二年五月二十九日の事件については天寿室日記は何も記述していない。その後文久二年十月廿二日の条の欄外に「英人横浜へ引取」と記され、更に同年十二月十二日の条の欄外に「夜九時殿岡英吉利館焼失」と記されているだけである。

極めて簡単ではあるが、東禅寺所蔵の天寿室日記を紹介し、そのうちより主として外国人関係の記事の釈文を作ってみた。先きにも述べた如く、この日記のかなりの部分が保存悪く、また、草卒の間に書き記したためか、読解に苦しんだところも少くない。

尚、幕末外国関係にうとい筆者がとり扱ったため、過誤も多いかと思うが、今宮新先生の御専門の一分野である幕末外交史に多少関連のあるものとして、筆を執った次第である。